

戦国初期の宇喜多氏について

— 文明と大永年間に於ける浦上氏との關係を中心に —

渡邊 大門

〔抄 録〕

宇喜多氏に關する研究については、直家期を中心にして、既にいくつかの論文が公表されてきた。それらの主要學説は、宇喜多氏が浦上氏の被官人であつたか否かという問題をはじめ、宇喜多氏の大名權力がいかなる條件のもとで形成されたか等々、戦国大名論を検討するうえで重要な論点を提示している。近年では、地域權力論・戦国期國衆論に關しても活発な議論が展開されてお

り、宇喜多氏の研究はその好素材であると言えよう。そこで、小稿では能家以前の宇喜多氏——文明と大永年間を中心に——につい

て、發給文書およびその動向を改めて検討し、浦上氏との關係を論じたものである。その結果、宇喜多氏は金岡莊を基盤として領主權を確立しており、浦上氏とは軍事的なレベルにおいて從屬にあつたことを指摘した。つまり、宇喜多氏は、被官人あるいは家臣として浦上氏配下に組み込まれておらず、領主間の緩やかな提携關係にあつたのである。

キーワード 宇喜多氏、浦上氏、赤松氏、戦国大名、地域權力

はじめに

本稿では、戦国期に於ける宇喜多氏——特に文明と大永年間を中心に——の動向を分析し、当該期の存在形態を述べるものである。宇喜多氏に關する研究に關しては、その關係史料の少なさから、決して多くはないと言える。それらの主要な研究は、直家期以降が大半であり、以

下のものがある。⁽¹⁾

①金井圓氏「織豊期に於ける備前——太閤検地の地域性の一例——」

『『地方史研究』九卷六号、一九五九

②柴田一氏「戦国土豪層と太閤検地——宇喜多領に於ける事例——」

『『歴史教育』八卷八号、一九六〇

③しらが康義氏「戦国豊臣期大名宇喜多氏の成立と展開」(『岡山県

史研究」六号、一九八四)

④寺尾克成氏「宇喜多氏領地の再検討」(米原正義先生古稀記念論文集刊行会編『戦国織豊期の政治と文化』続群書類従完成会、一九九三)⁽²⁾

⑤久保健一郎氏「宇喜多氏権力の形成」(研究代表者・深谷克己氏編『岡山藩の支配方法と社会構造(一九九四・九五年度科学研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書)』早稲田大学文学部、一九九六)

⑥しらが康義氏「宇喜多氏関係史料目録」(⑤深谷氏編著)

⑦久保健一郎氏「境目」と領主と「公儀」(岡山藩研究会編『藩世界の意識と関係』岩田書院、二〇〇〇)

⑧岸田裕之氏「備作地域の戦国時代と中世河川水運の視座」(同氏『大名領国の経済構造』岩波書店、二〇〇一)⁽³⁾

⑨横山定氏「宇喜多直家発給文書編年化への一試案」(『岡山地方史研究』一〇〇号、二〇〇三)

①②④は、宇喜多氏領における太閤検地に関する内容のものである。
⑥は宇喜多氏関係の史料目録であり、⑨は宇喜多直家発給文書の花押に着目し、その編年化を行ったものである。⑥⑨は、宇喜多氏の基礎的研究として貴重なものである。

本稿と特に関わりが深いのは、③⑤⑦⑧の研究である(ただし、⑦は⑤を発展させたもの)。以下、三氏の論文を要約しておく。

まず、③のしらが氏論文は、①農民闘争の圧伏、②領主間紛争の調停、③他国大名の侵入への対抗、を個別領主が期待し、それにより宇

喜多氏が大名権力を形成するとしている。この説は、先行研究を踏まえた、オーソドックスな指摘であるといえよう。

一方、久保氏の場合は、宇喜多氏が浦上氏の完全な従属下にあったのではなく、軍事的なレベルでの従属下にあったとする。つまり、久保氏の言葉を借りれば、宇喜多氏は「家中」型「家臣」でなく、「国衆」型「家臣」ということである。宇喜多氏権力は、大勢力(この場合は、織田氏と毛利氏)の狭間にある「境目」にあつて、「境目」の領主層の期待を担って結集するところに、「境目」なり的大名権力が形成される条件があつて成立した。少なくとも直家段階では、軍事力を中心とした「半公儀」しか形成できず、統一政権の「公儀」下に入るにより、近世大名への転化を図り得たとする。

⑧の岸田氏論文は、「新出沼元家文書」の紹介と分析を通して、宇喜多氏が吉井川・旭川の下流域や内海の水運に深く関与しながら発展し、各地の国人・土豪・地侍らと同盟・服属・討滅させながら支配領域を拡大し、戦国大名化したと指摘した。また、戦国時代における備作地域の支配秩序が、婚姻関係に基づいた国衆の連合によつて保持されていたことも重要な指摘であらう。

しかし、いずれの説も直家より前の段階——能家以前の動向——には触れておらず、直家登場以前における宇喜多氏存在形態が十分明らかにされたと言ひ難い。確かに直家期における浦上氏との関係は重要であるが、加えて直家登場以前の浦上氏との関係に触れておかなければ、宇喜多氏の存在形態を明らかにしたと言えないであらう。⁽⁴⁾ いずれにしても、それらの理由は史料の制約と共に、既に指摘されているとおり、

近世の編纂物が後世に与えた影響も大きい。⁽⁵⁾ しかしながら、かなり史料上の制約があるものの、宇喜多氏の大名権力形成過程を考えるうえで、それらの検討は欠かすことができないと思われる。

そこで、小稿では文明年間から大永年間を中心にして、宇喜多氏の動向を検討し、特に浦上氏との関係を探ることとしたい。

一、文明・明応年間の宇喜多氏

宇喜多氏の出自に関しては、関連史料が十分でないため、未だ不明な点が多い。宇喜多氏の事蹟を記した史料には、「宇喜多和泉守三宅朝臣能家像賛」⁽⁶⁾がある（以下「賛」と略す）。「賛」は大永四年（一五二四）、京都南禅寺の僧九峰宗成によって書かれたものである。「賛」には、宇喜多氏の本貫地が備前児島であること、本姓が三宅氏であることが記されている。しかも三宅氏については、「本貫為百済王、兄弟曾来児島、中古立三宅姓」とある。前掲しらが氏論文では、備前児島を出自とすることについて、宇喜多氏の海賊的な性格を物語っている点を指摘している。⁽⁷⁾

加原耕作氏によれば、「賛」は能家自身が宗成に依頼して書いてもらったものであり、その出自は能家自身が認めるところであったとする。確かに「賛」は、同時代に成立したものであり、信頼を置くべき点が多い。しかしながら、史料的な性質を鑑みれば、その活躍振りに関して、オーバーな表現があるように感じる。加原氏が指摘するように、三宅氏が百済王の系譜を引くことに関しては、疑問を感じざるを

得ない。他の宇喜多氏の出自に関する史料は、近世に成立した編纂物が多く信を置きたいがゆえに、「賛」の史料的な性質を見極め、他の史料と合わせて利用すべきであろう。いずれにせよ、宇喜多氏の出自に関しては、今後さらに検討が必要であると考えられる。

宇喜多氏が史上に登場するのは、応仁の乱以降を待たなければならない。それ以前の動向に関しては、一切が不明である。そして、宇喜多氏に関する初見史料は、次のものである。

【史料1】

〔端裏書〕
「成光寺来迎免名主職寄進状案文文明元己丑五月十六日」

奉寄進

金岡東庄成光寺来迎免名主職之事

合参段肆拾代者

右下地之正穢者、寺家分名主職地利分事、沙弥寶昌并「妙意（異筆）」為後生菩提、所寄進申実也、若親類他人中仁不可有違乱煩候、於子孫仁煩之儀申候者、可為不孝仁候、又者為公方可被処御罪科、仍為後日仁状如件、

宇喜多五郎右衛門入道

文明元年己丑五月十六日

沙弥寶昌（花押）⁽⁸⁾

この史料は、宇喜多寶昌が「金岡東庄成光寺来迎免名主職」の「合参段肆拾代」を「為後生菩提」として、西大寺に寄進した内容のものである。金岡東庄は、鎌倉期に大和国額安寺の所領となった。金岡東庄は現在の岡山市内、吉井川下流の右岸に位置する。室町期には、山城国二尊院領および北野社領となり、後に同庄の田畠は額安寺の末寺

である西大寺へと寄進された。⁽⁹⁾ この史料によって、寶昌は少なくとも金岡莊を中心とした地域に勢力基盤を保持していたことがわかる。

前掲藤井氏論文によれば、金岡莊では西大寺門前を中心に市が立ち、酒屋、魚屋、餅屋、鋳物師等の商工業の座が存在した。そこでは商工業が発達し、国(領家)方や地頭方が徴税のため、一定の規則を設定した。また、西大寺付近が河港から発達した点より、港市としての性格を有していたと考えられている。したがって、史料的な根拠が十分でないとは言え、宇喜多氏とこうした商工業との関わりは、前掲加原氏論文が指摘するように、決して切り離すことができないと考えられる。

また、史料中の「為公方可被処御罪科」という文言に着目するならば、まだ宇喜多氏は在地に強固な領主権を確立したとは言えないように感じる。この公方という文言は、当時の守護¹¹赤松氏を示すと思われる。「為公方可被処御罪科」という文言一般について笠松宏至氏は、①中央権力の崩壊乃至矮小化によって、売買行為の永続を保証すべき権威がこの頃在地の領主権力の中に下降包摂された、②在地領主権はこれより早く、既にかかる権威と能力を保持していたが、応仁以来のアナーキーな社会情勢によって、彼等もまた在地における安定的な裁判権力とみなされ難くなった、という見解を提示している。¹⁰⁾ この見解を念頭において考えると、文明元年(一四六七)は赤松政則が備前等の三ヶ国守護職を山名氏から奪還した年でもある。したがって、この史料の内容について、形式的ながらも新たな上級領主¹²赤松氏に保証を求めたと考えられるであろう。

それでは、宇喜多氏は上級領主権力とどのように結びついていたのであろうか。その一端を示すのが、次の史料である。

【史料2】

金岡東庄之内三嶋跡等事、任御奉書并御渡状之旨、所渡付申之状如件、

文明式

宇喜多修理進

五月廿二日

宗家(花押)

西大寺別当

清平寺侍者

御中¹¹⁾

宇喜多宗家が先に発給された、金岡東莊のうち三嶋跡等に関する奉書及び渡状の旨を西大寺別当に渡し付けたものである。宛先の清平寺は、西大寺の子院である。金岡東莊内の藤太給、国松名、三嶋跡等については、応仁の乱の「合戦祈禱料所」として、既に西大寺に寄進されていた。¹²⁾ その後、応仁元年(一四六七)と同三年(一四六九)には、同地で在地土豪による濫妨が行われたことがわかつている。¹³⁾

応仁の乱後、備前国の支配は山名氏から再度赤松氏の手に渡り、守護として赤松政則が在任していた。しかし、まだ政則が幼少であったため、実際の執務は浦上則宗に委ねられていた。則宗は松田遠江入道藤栄と一族の浦上基景を守護代に任命し、その支配を行っていたことが指摘されている。¹⁴⁾

ところが文明二年(一四七〇)四月、浦上源六が兵糧料所として同地を競望したため、浦上則宗ら赤松氏奉行人は備前国守護代浦上基景、

松田遠江入道に対し、その妨げを止めさせるよう命じた。⁽¹⁵⁾ その命を受けた浦上基景は、さらに郡代クラスと思われる嶋村秀久に同内容の命令を伝えた。⁽¹⁶⁾ さらに嶋村秀久は、赤松氏奉行人奉書と浦上基景渡状の旨を西大寺雑掌に渡し付けるよう、宇喜多宗家に命じたのである。⁽¹⁷⁾ まさしく史料2は、嶋村氏の命を受けて発せられたのである。

以上の点を考慮すれば、宇喜多氏は当初浦上氏の配下にあったものと推測される。しかし、宇喜多氏の場合は、浦上氏の配下にはあったものの、関係としては比較的緩やかな従属下にあったと考えられる。むしろ、嶋村氏の方が宇喜多氏より上位に位置し、浦上氏と近い関係にあったと推測される。宇喜多氏は、守護代浦上基景、松田遠江入道や郡代嶋村秀久のように支配機構の系列に属していないのである。それゆえに、宇喜多氏は嶋村氏を通じて、命令を受けていたのであろう。そうした点を裏付ける意味で、次のような史料がある。

【史料3】

邑久郷内安仁社経免事、中吉左京進申掠候間、不可渡候由、宇喜多方へ申下候、其分可存知候、恐々謹言、

文明式

十一月廿日

嶋村弾正左衛門殿⁽¹⁸⁾

則宗（花押）

安仁神社経免（免田）への中吉左京進の違乱行為に対して、免田を中吉氏に渡してはならないことを宇喜多氏へ命じ、そのことを知っておくようにという則宗から嶋村氏に宛てた書状である。邑久郷は豊原荘内にあり、鎌倉期に東大寺東南院領として立荘された南北条など

の加納地であった。

この史料の「宇喜多方へ申下候」も箇所を見れば、宇喜多氏が浦上氏から事前に命令を受けていたことがわかる。しかし、これは緊急自体であったと考えられ、改めて嶋村氏に一連の流れを伝えたところを見ると、本来浦上氏から嶋村氏そして宇喜多氏と命令が伝わるのが通常ルートであったと推測される。やはり、宇喜多氏は浦上氏の完全な従属下に置かれておらず、末端に位置していたのである。また、文明九年（一四七七）の宇喜多寶昌寄進状によると、宇喜多氏が邑久郷にも所領を保持したことがうかがえ、浦上氏にとって宇喜多氏は無視できない存在だったと考えられる。

一方で、浦上氏と宇喜多氏が在地レベルにおいて、必ずしも従順な姿勢を見せ続けたわけではない。宇喜多氏が浦上氏との関係が、在地レベルにおいて微妙な関係であったことは、次の史料によってうかがうことができる。

【史料4】

奉寄進金岡東庄領家之内、西大寺市場敷并諸公事人足等至、為燈油免、所令寄附之状如件、

延徳四

宇喜多藏人佐

七月廿五日

久家（花押）

西大寺

別当御房⁽¹⁹⁾

この史料は、宇喜多久家が金岡東庄領家職のうち「西大寺市場敷并諸公事人足等」を「燈油免」として寄進した内容のものである。とこ

ろが、全く同じ日に浦上宗助が金岡西荘公文のうち「西大寺市場敷」を造営として寄進し、併せて代官の締を停止しているのである。⁽²⁰⁾ 同日には、締を行った張本人である、宇喜多二郎三郎に対して停止するよう求めている。⁽²¹⁾ この宇喜多二郎三郎は久家と別人であるが、一族であることは疑いない。

これまで述べてきたように、宇喜多氏は金岡東荘に勢力基盤を持ち、それらを西大寺に寄進してきた。一方で、一族である宇喜多二郎三郎は、金岡西荘への侵略行為を行っている。宇喜多氏は浦上氏の緩やかな従属化にありながらも、自らの勢力基盤拡大の動きを見せていた。この事実は、宇喜多氏が浦上氏に従属する態度を見せつつも、在地において着実に勢力拡大を図る矛盾した姿が浮き彫りとなる。

ところで、宇喜多氏は明応年間に在京していた徴証がある。明応二年(一四九三)四月、浮田(宇喜多)新兵衛の名前が見える。⁽²²⁾ また同年、浦上氏の留守宅を訪れた蔭涼軒主が、浮田(宇喜多)将監に三物を預けて帰宅している。⁽²³⁾ この宇喜多氏は、いずれも同族と考えられる。特に後者の史料によれば、宇喜多氏と浦上氏との繋がりが深さを増したと推測される。明応二年(一四九三)に勃発した明応の政変以降、赤松氏家臣団内部においては、浦上氏と別所氏との対立が明確となった。史料的な徴証を欠くものの、浦上氏・別所氏とも諸勢力の統合を図ったに違いない。したがって、宇喜多氏も赤松氏内部における政争の中で、徐々に浦上氏陣営に引き込まれたのである。

次に掲出する史料は、赤松氏領国(播磨・備前・美作)における、宇喜多氏の立場を示すものである。

【史料5】

就御知行分之儀、委細承候、於此儀者、何之仁訴訟被申候共、於我々不可存別儀候、其子細者、祖父因幡守殿依大忠、松泉院殿様并御一見状頂載与申、殊御親父御討死之上者、旁以不可有相違候、為御意得、存分申候、恐々謹言、

(宇喜多)

四月廿七日

久家(花押)

難波豊前殿

御返報⁽²⁴⁾

備前の土豪難波氏は、自らの知行する所領について、訴訟を構えていたようである。しかし、久家の立場は「何之仁訴訟被申候共、於我々不可別儀候」というものであり、できることは難波氏の先祖代々の功労を認め、それらが誤りでないことを伝えるのみであった。⁽²⁵⁾ 史料中の「松泉院殿(赤松政則)」という文言から、この書状は政則没後の明応五年(一四九六)以降のものであると考えられる。この史料から、宇喜多氏は上級権力への取次の役割も果たしていたと言えよう。難波氏は宇喜多氏と同様に備前国の土豪クラスであったが、難波氏より宇喜多氏の方が相対的に高い地位にあったと考えられる。その上級権力とは、政則没後に浦上氏と別所氏とが反目した状況を鑑みれば、浦上則宗(あるいは村宗)を指すとみて間違いない。

文明・明応期の宇喜多氏は、一介の在地の有力者から、徐々に浦上氏の従属下(緩やかな関係から強固な関係へ)に入る過程であった。特に、浦上氏と別所氏は、明応の政変を境にして互いに権力闘争を繰

り広げていた。先の『蔭涼軒日録』の記事と併せ考えれば、宇喜多氏は徐々に浦上氏配下へと組み込まれたのであろう。

「賛」によると、明応六年（一四九七）に宇喜多能家が浦上宗助のもとで、松田氏と交戦したことが知られる。つまり、前年の政則の死をもって、赤松氏領国下における土豪・国人層の系列化が進んだのである。

二、永正と大永年間の宇喜多氏

年次の明らかな延徳四年（一四九二）七月を境にして、永正一六年（一五一九）二月までの間、宇喜多氏の発給文書が見られなくなる。⁽²⁶⁾

その辺りの原因は不明である。次に宇喜多氏の発給文書が見られるのは、宇喜多氏中興の祖と呼ばれる宇喜多能家のものである。能家については、やはり関連史料が少なく、その事蹟が詳らかではない。冒頭で触れた「賛」には、浦上氏股肱の臣としての軍事的な活躍が大きく描かれている。浦上氏に従って活躍したことは疑いがないと思われるが、その実像に関しては慎重な検討が必要である。その点は、後述することとしたい。

能家に関する初見史料は、次のものである。

【史料6】

奉寄進金岡領家村田下地之事

合参拾五代者

在所 大堤二在之

右寄進申下地意趣者、為妙蓮禪尼茶湯領と末代寄進実也、公方正穰ハ領家村田四斗五升代、奉行之公事、加徴以下分、半公事、半加徴也、此上ニ聊諸公事等無之候、若同名一家中仁違乱之輩出来候ハ、為地下公方堅可有御成敗者也、仍状如件、

宇喜多平左衛門尉

永正拾六年卯己式月十一日

能家（花押）

西大寺

成光寺⁽²⁷⁾

参

この史料は、能家が西大寺に対して「金岡領家村田」の「合参拾五代」を寄進したものである。寄進の理由の一つには、「妙蓮禪尼茶湯領」としての意味合いがあった。

この史料中には「為地下公方堅可有御成敗者也」という文言を見ることが出来る。このことについては、「地下の沙汰」が「公方の沙汰」を執行する場での証人的・補足的立場から、在地の実態面で併存する独自の地位を獲得したとの指摘がある。⁽²⁸⁾

加えて、宇喜多氏が公方正税を課していることが判明する。公方の文言が、守護赤松氏を指すことは間違いないが、書止文言が「仍状如件」と直状形式であることを踏まえれば、独自で賦課した可能性が高いと考えられる。この頃、赤松氏の惣領である義村は、浦上村宗と不和に陥っており、備前国ではその支配が十分浸透していなかった。その点を考慮すれば、宇喜多氏がその間隙を縫って、着実に在地支配を展開したと推測される。

一方で能家は、大永三年（一五二三）にも沽券状を発給している。⁽²⁹⁾

この史料には四至を示すに際して、「西者宇喜多七郎五郎殿田」という文言が見られる。この宇喜多七郎五郎が、能家と同族であることは疑いなくであろう。また、宇喜多七郎五郎が保持する田の範囲は不明であるが、金岡荘近隣に土地を集積していたとも考えられる。したがって、宇喜多氏は金岡荘を中心に所領を保持し、在地支配を展開していたことを再確認できよう。同文書には、史料6同様「為地下公方堅可有御成敗者也」という文言があり、宇喜多氏が上級権力を意識しつつも在地に着々と浸透した側面を読み取れる。

一方で、戦乱時における宇喜多氏の存在形態は、いかなるものであったのだろうか。従来、宇喜多氏が能家の代に台頭したのは、永正十五年（一五一八）以降に赤松義村と浦上村宗が確執した頃であるとの指摘がある。⁽³⁰⁾しかし、それらは軍記物の記述を中心とした内容がほとんどである。当時における宇喜多氏の動向を示す史料としては、次の三点のものがあるので、以下提示して検討することとしたい。

【史料7】

去年十一月晦日、至三石要害御屋形様被寄御馬、三ヶ国軍勢囲、既難儀之刻、松田方合力之段為可申渡、為後詰十二月廿一日至可真郷石蓮寺令出張、同廿四日新田庄安養寺迄着陣仕、明石家来之族私宅放火候、因之号和^(マカ)之儀候、再陣之条、併懇切之給誠不浅候、永不可存忘、恩賞必可相計候、恐々謹言、

正月十二日

村宗^(能家)
宇喜多和泉守殿⁽³¹⁾

史料の内容は、昨年の一二月晦日に赤松義村が浦上氏の居城三石城に攻め寄せたこと、松田氏に援軍を申し渡すべく、一二月二日に宇喜多氏が可真郷石蓮寺から新田庄安養寺に着陣したことを記したものである。史料の末尾には、赤松氏と浦上氏が和議を結ぶことを記し、浦上氏が宇喜多氏に恩賞を与えることを約束している。つまり、文明・明応年間における浦上氏と宇喜多氏の関係と比較すれば、かなり強力なパートナーシップを結んでいたと言っても過言ではない。その背景には、村宗が当主義村との対決を控え、その軍事力の強化に努めた結果であろう。

この史料は年未詳であり、今まで年次比定が行われてこなかった。しかし、この史料には「去年十一月晦日、至三石要害御屋形様被寄御馬」という文言が含まれており、重要なヒントとなる。次に関連する史料を掲出する。

【史料8】

永正十七年辰庚十一月廿七日、（中略）浦上掃部助村宗ヲ可有対⁽³²⁾治、依御憤リニ、御屋形義村様、去年十一月九日に御馬ヲ可被寄ニテ、浦上福立寺迄御出陣、然ハ村宗ヲ備前国ノ三石城ニ被楯籠所エ詰寄（中略）、俄ニ和與ノ勢ヲ被成（以下略）⁽³²⁾

【史料9】

（前略）去永正一六年卯一一月八日仁、兵部少輔義村率数千騎之

軍勢、浦上城仁押寄、数月之間盡武略、(以下略)⁽³³⁾

両史料とも一致するところは、一月九日(または八日)に赤松義村が村宗を討伐するために出發したこと、そして若干の時間を経て浦上氏竊る三石城に攻め寄せたことである。前者の史料には、赤松氏と浦上氏が和議を結んだことを記している。以上の史料に「賛」の「同年(永正一六年)十二月、能家將精兵二千余、陣乎新田安養寺」という記述も参考にすると、先の史料の年次は永正一七年(一五二〇)に比定されよう。⁽³⁴⁾

したがって、この史料を参考にするならば、義村と村宗が交戦状態に入ったときから、能家が村宗方に付いて戦っていたことが判明する。また、『大日本史料』の関係する各条と「賛」の記事を比較すると、歴史的事実に関してのみに限定すれば、その年代は概ね正確であるといえることができる。

このように宇喜多氏台頭の契機は、義村と村宗との確執であり、浦上氏によりその軍事力が着目されたのである。しかし、当時における宇喜多氏の認識のされ方は、どのようなものだったのであろうか。鵜莊の関連史料から、考えることとしたい。まず、浦上氏の被官人とみなされる美作国住人栗井氏・中村氏については、「浦上與力作州之住人栗井・中村之両城仁令発向」あるいは「浦上掃部助村宗、元ヨリ中村一味ノ間」とあるように、「與力」または「一味」と認識されている⁽³⁵⁾。彼らは具体的な名前が掲出されていることから、浦上氏とかなり緊密な関係を持っていたと考えてよいであろう。とりわけ、中村氏は美作国守護代を務めており、宇喜多氏と比較すると、その身分的な

格差がかなり大きいと言えるであろう。

一方、宇喜多氏については、具体的に名前が表示されていない。宇喜多氏らは「・・・村宗、備作領国之率賊徒」あるいは「惡逆無道之凶徒等数千騎庄内仁乱入」と記されており、その他大勢と同じ扱いである。宇喜多氏は、明らかに栗井氏・中村氏よりも低く見られている⁽³⁶⁾。もちろん、攻撃される側として、このような記述になったのであろうが、実名が記されていない点を考慮すれば、当時宇喜多氏は浦上氏と強固な関係ではなく、軍事的従属というレベルで繋がっていたと、当時みなされていたと考えられる。

こうして、宇喜多氏は浦上氏のもと、赤松氏攻略のために、大きな役割を果たしたと考えられる。次に示す薙刀は、備前国長船氏に作らせたものであるが、これなどは相当な財力が必要であったであろう。

【史料10】

薙刀

(表銘) 備前国住長船次郎左衛門尉勝光
同与三左衛門尉祐定

宇喜多和泉守三宅朝臣能家作之

(裏銘) 永正十八年二月吉日⁽³⁷⁾

長船氏が浦上氏と繋がりを持っていたことは、小山金波氏が指摘するところである。⁽³⁸⁾ 刀剣の作成に際しては、浦上氏の斡旋があったと思われるが、やはり豊富な財力がなければなし得なかったと考えられる。また、浦上氏による赤松義村暗殺後には、次の史料を見ることができ

【史料11】

抱分寺元名事、難波次郎右衛門（同姓）雖違乱候、任相伝道理、不可有
領知相違之由候也、恐々謹言、

大永元

（宇喜多）

十月十五日

能家（花押）

（宛名欠く）^{（39）}

この史料は宛名を書くが、能家が美作国寺元名を安堵したものである。史料の末尾が「不可有領知相違之由候也、恐々謹言」とあるように、奉書文言となっている。つまり、この文書の発給の主体者は、浦上村宗ということになる。この史料をもって、宇喜多氏を浦上氏の被官人とすることも可能かもしれないが、軍事従属下における一時的な処置と見ておきたい。

大永以降の能家の動向は、どのようなものであったのであろうか。大永年間には当主を討たれた赤松氏旧臣グループが播磨国に押し寄せ、浦上氏と抗戦状態にあった。「賛」の記述によれば、宇喜多氏はその間も浦上氏方にあり戦った。やはり、浦上氏と軍事行動を共にしていたのである。

以上触れたとおり、宇喜多能家は赤松氏と浦上氏の抗戦状況において、浦上氏の軍事的従属下にあった。既に触れたとおり、宇喜多氏は金岡東荘を本拠とし、商工業にも深く関与した富裕層であったと考えられる。当時、赤松氏の有力被官人として、幕府とも深いパイプを持つ浦上氏と比較のしようはないが、金岡荘を中心とした在地の有力者として君臨していたと思われる。文明年間以降、浦上氏とは浅からぬ

関係にあったが、むしろそれは緩やかな関係であった。その台頭の契機は、やはり永正末期における、赤松氏と浦上氏との対決であった。以後、両者の関係はますます強くなってゆくのである。ただし、その関係は当主と被官人といった関係にまで発展しなかったと見てよいであろう。

むすびにかえて

宇喜多氏が浦上氏の家臣（被官人）であるか否かは、これまで長く取り上げられた議論であった。しかしながら、それらの議論は各時代における存在形態や、当主・家臣（被官人）のメルクマールが十分に提示されなかったといってもよい。つまり、冒頭で述べたように、直家以降に限定されていたのである。

小稿においては、宇喜多氏が浦上氏に軍事的に従属していた側面を強調してきたが、もとより史料的な制約があり、決して十分なものではない。最後に、赤松氏とその被官人層との関係に触れつつ、浦上氏と宇喜多氏との関係について考えてみたい。

赤松氏の場合、その被官人層に対して、自らの一字を与えている。例えば、政則の場合は、「則」字を①浦上「則」宗、②別所「則」治、③小寺「則」職のように与えている。同様に、義村の場合も「村」字を①浦上「村」宗、②別所「村」治、③小寺「村」職のように与えている。赤松氏の場合は、若干の例外はあるものの、守護代クラスの重臣に一字を与えていたのである。一字書出は室町末期以降、主従間の一層強固な関係を求めるために行われたと指摘されている。^{（40）}

こうした一字書出のケースは、浦上氏の場合にも一致することが確認されている。文明十三年（一四八一）に則宗は、中村氏に「宗」字を与え、宗国と名乗らせている。⁽⁴¹⁾このような事例については、加冠状はないものの、小寺氏の被官人である長井氏のケースを挙げることができる。⁽⁴²⁾そうすると、宗家については、則宗の「宗」字を与えられたとも考えられるが、能家に関してはそうでもない。むしろ、宇喜多氏の場合は、歴代が「家」字を名乗っているのである。後の直家に関しても同様である。したがって、一字書出という視点からは、浦上氏と宇喜多氏間での主従制の強さは認められない。⁽⁴³⁾

また、もう一点は、宇喜多氏は浦上氏から所領の給与を受けたと考えにくいことである。上級領主層が在地の土豪層を被官化する過程において、所領の給与は重要なことであろう。既に見てきたとおり、宇喜多氏は金岡東荘を本拠としており、寄進なども行ってきた。先に掲出した、永正一六年二月一日宇喜多能家寄進状にもあるように、「為地下公方堅可有御成敗者也」という文言があり、在地に確固たる地位を築いてきた。⁽⁴⁴⁾このことは、大永三年（一五二三）の沽券状にも見られるところである。補足するならば、宇喜多氏の発給文書は数少ないが、特に能家のものは「状如件」という直状形式を採用している。つまり、能家は金岡東荘を中心としたエリアに領主権を確立していたのである。

結論を言うならば、文明〜大永年間の宇喜多氏は、浦上氏との関係において、次のように言えるであろう。

①宇喜多氏は、文明年間から金岡東荘を中心に領主権を確立してお

り、能家の代には一層強固なものになった。能家の発給文書からわかるように、直状形式を採用しており、在地レベルにおいて自らの意思を反映させていたことがわかる。

②備前国の支配機構として、嶋村氏等のように守護代・郡代・奉行人等の系列に入っていない。

③浦上氏との関係を見れば、名前の一字を与えられることもなく、主従間の強固な関係を認めたがたい。

④宇喜多氏は、明応の政変や赤松氏と浦上氏の対立の際に、常に浦上氏側へと系列化された。それは、軍事的な従属に止まるもので、家臣化あるいは被官化を示すものではない。

つまり、宇喜多氏は金岡東荘を中心に領主権を確立しており、浦上氏とは軍事的な従属下において緩やかな提携を結んでいた。つまり、宇喜多氏は、被官人あるいは家臣として浦上氏に取りこまれていなかったと言えるであろう。なお、直家期以降における、宇喜多氏については、稿を改めて論じることとしたい。

〔注〕

- (1) 辞典の類では、加原耕作氏「宇喜多氏」（山本大氏・小和田哲男氏編『戦国大名家臣団事典 西国編』新人物往来社、一九八二）、同「宇喜多氏」（山本大氏・小和田哲男氏編『戦国大名系譜人名事典 西国編』新人物往来社、一九八六）がある。谷口澄夫氏「城下町岡山の成立」（魚澄惣五郎氏編『大名領国と城下町』柳原書店、一九五七）は、城下町岡山と宇喜多氏に触れた貴重な研究であるが、近世の編纂物に頼りすぎの

感が否めない。また、現段階では活字化されていないが、畑和良氏「浦上村宗と守護・国人」(岡山地方史研究会、二〇〇五年四月例会における口頭報告)も永正・大永年間における宇喜多氏の性格を論じた、貴重な成果である。なお、畑氏は参加できなかった筆者に対し、レジュメをご恵与下さった。記して感謝申しあげたい。

- (2) 寺尾氏には、「浦上宗景考—宇喜多氏研究の前提—」(『國學院雜誌』九二・三、一九九二)があり、宇喜多氏についても多くの紙数を割いている。

- (3) 同論文の初出は、『熊山町史調査報告』四号(一九九二)。後に『熊山町史 参考資料編』(熊山町、一九九五)に収録された。

- (4) 畑氏前掲発表「浦上村宗と守護・国人」では、種々議論のある中で、能家を村宗の家臣と規定した数少ない研究である。この点に関しては、後述することとしたい。

- (5) この点は従前から指摘されているが、森俊弘「岡山藩士馬場家の宇喜多氏関連伝承について—「備前軍記」出典史料の再検討—」(『岡山地方史研究』九五号、二〇〇一)によって、「備前軍記」の出典史料が子細に分析されている。

- (6) 「宇喜多和泉守三宅朝臣能家像賛」(『続群書類従』八輯上)

- (7) 三宅氏の家臣としての性格は、田中健夫氏「三宅国秀の琉球遠征計画をめぐって」(竹内理三博士古稀記念会『続莊園制と武家社会』吉川弘文館、一九七八)、および三宅克広氏「備前国連島の「海賊」三宅国秀について」(『倉敷の歴史』六、一九九六)を参照。

- (8) 文明元年五月一六日宇喜多寶昌寄進状(『西大寺文書』一六号『岡山県古文書集』第三輯)

- (9) 金岡荘に関する研究は、次の論文がある。藤井駿氏「額安寺領の備前国金岡荘」(『吉備地方史の研究』法蔵館、一九七二)。同論文の初出は、

『吉備地方史』第八号(一九五三)。岡本明郎氏「元享三年備前国金岡東庄和与状の「塩屋里」について」(『日本塩業の研究』一九、一九八〇)。

(10) 笠松宏至氏「中世在地裁判権の一考察」(同氏『日本中世法史論』東京大学出版会、一九七九)。初出は、宝月圭吾先生還暦記念会編『日本社会経済史研究 中世編』吉川弘文館(一九六七)。

- (11) 文明二年五月二二日宇喜多宗家渡状(『西大寺文書』二〇号『岡山県古文書集』第三輯)

- (12) 応仁元年九月一八日赤松氏奉行人連署奉書(『西大寺文書』八号『岡山県古文書集』第三輯) 他

- (13) 応仁元年二月九日赤松氏奉行人連署奉書(『西大寺文書』一一号『岡山県古文書集』第三輯)、応仁三年卯月一六日赤松氏奉行人連署奉書(『西大寺文書』一四号『岡山県古文書集』第三輯)。

- (14) 浦上則宗に関しては、次の研究がある。

① 水野恭一郎氏「赤松被官浦上氏についての「一考察」(同氏『武家時代の政治と文化』創元社、一九七三)。初出は、『史林』五四・四(一九七一)。

② 野田泰三氏「戦国期における守護・守護代・国人」(『日本史研究』四六四号、二〇〇一)。

③ 渡辺真守氏「室町後期守護被官層の研究」(室町・戦国期畠山家・赤松家発給文書の帰納的研究)二〇〇三。

④ 小林基伸氏「浦上則宗論」(矢田俊文氏編『戦国期の権力と文書』高志書院、二〇〇四)。

- (15) 文明二年四月七日赤松氏奉行人連署奉書(『西大寺文書』一七号『岡山県古文書集』第三輯)

- (16) 文明二年五月七日浦上基景渡状(『西大寺文書』一八号『岡山県古文書集』第三輯)

- (17) 文明二年五月一九日嶋村秀久渡状〔西大寺文書〕一九号『岡山県古文書集』第三輯
- (18) 文明二年一月二〇日浦上則宗書状〔安仁神社文書〕五号『岡山県古文書集』第三輯
- (19) 延徳四年七月二五日宇喜多久家寄進状〔西大寺文書〕二三号『岡山県古文書集』第三輯
- (20) 延徳四年七月二五日浦上宗助寄進状〔西大寺文書〕二四号『岡山県古文書集』第三輯
- (21) 延徳四年七月二五日浦上宗助判物〔西大寺文書〕二五号『岡山県古文書集』第三輯
- (22) 『薩涼軒日録』明応二年四月三〇日条
- (23) 『薩涼軒日録』明応二年七月二三日条
- (24) 年未詳四月二七日宇喜多久家書状〔難波文書〕五号『岡山県史』第二〇巻 家わけ史料
- (25) 難波氏の活躍については、文明一三年四月七日赤松政則袖判難波行豊軍忠状〔難波文書〕三号『岡山県史』第二〇巻 家わけ史料を参照。
- (26) ただし、先に掲出した年未詳四月二七日宇喜多久家書状は年次未詳であるが、明らかに明応五年（一四九六）以降のものである。
- (27) 永正一六年二月一日宇喜多久家寄進状〔西大寺文書〕三四号『岡山県古文書集』第三輯
- (28) 笠松氏前掲論文。
- (29) 大永三年一月五日宇喜多久家沽券状〔西大寺文書〕三六号『岡山県古文書集』第三輯
- (30) 浦上村宗に関しては、水野恭一郎氏「守護代浦上村宗とその周辺」〔武家社会の歴史像〕国書刊行会、一九八三。同論文の原題・初出は、「守護代浦上村宗」〔鷹陵史学〕三・四号、一九七七。

- (31) 年未詳正月二二日浦上村宗書状案〔三石村〕『黄薇古簡集』
- (32) 「古代取集記録」〔大日本史料〕永正一六年十二月三十日条
- (33) 「官符宣記」〔大日本史料〕永正一六年十二月三十日条
- (34) なお、「赤松記」〔群書類従〕二十一輯に「十一月九日に小塩より御馬出され、浦上のふくりう（福立）と申を御仁にて候、其後備前の三石迄御馬を寄られ候、（中略）備中より松田将監（元成）と申者、浦上一味として後巻（以下略）」という記述がある。この箇所も永正十七年（一二二〇）に比定すべきであろう。
- (35) 「官符宣記」「古代取集記録」（ともに『大日本史料』永正一六年十二月三十日条）。なお、「一味」という用語が頻出することは、前掲畑氏レジユメから学ばせていただいた。
- (36) 「古代取集記録」〔大日本史料〕永正一六年十二月三〇日条。同史料には、「・・・義村之被官仁浦上掃部助村宗」とあるように、村宗は義村の被官人として認識されている。
- (37) 牛歩老人「武将と愛刀（十六）」〔刀剣と歴史〕六五六号、二〇〇四
- (38) 小山金波氏「赤松政則」（財団法人日本美術刀剣保存協会姫路支部、一九七七）
- (39) 大永元年一〇月一日宇喜多久家書状〔難波文書〕八号『岡山県史』第二〇巻 家わけ史料。先の畑氏がレジユメ紹介史料で、史料中の「之由候也」という点に着目し、この史料を奉書としている。
- (40) 加藤秀幸氏「一字書出と官途（受領）挙状の混淆について」〔古文書研究〕五、一九七一
- (41) 文明一三年二月九日浦上則宗加冠状〔円尾文書〕五号『兵庫県史』史料編中世三
- (42) （文亀三年）二月一六日中村則貞書状〔大徳寺文書〕四八九号『兵庫県史』史料編中世七）によると、「小寺（則職）方被官長井新衛門尉（職

重」とある。職重の「職」字は、明らかに則職から与えられたものであろう。

(43) 後の宇喜多氏の被官人には、岡家利なる人物が登場する。これなどは、宇喜多氏の「家」字を与えた事例であり、宇喜多氏と岡氏の関係の強さを窺わせるものである。

(44) 大永三年十一月五日宇喜多能家畠地沽券状〔西大寺文書〕三六号〔岡山県古文書集〕第三卷)

〔付記〕

小稿は、二〇〇五年九月二十三日に開催された、佛教大学大学院博士論文中間報告演習での発表をもとに成稿したものである。当日、貴重な助言をいただいた指導教授の今堀太逸先生をはじめ田中文英先生、渡邊忠司先生、貝英幸先生、竹内智宏氏に厚くお礼を申しあげる。

(わたなべ だいもん

文学研究科日本史学専攻博士後期課程)

(指導・今堀 太逸 教授)

二〇〇五年十月十九日受理